

ヒエの栽培法

富山澄雄・田村紘吉・十川幸一

(宮崎県総合農業試験場)

HATAKEYAMA, S., TAMURA, K. and TOGAWA, K.

On the Cultivation of Japanese Millet.

(1) The Effect of Seeding time and Cutting stage on Yields.

宮崎県の山間地には、昔からヒエ (*Panicum, Crwsgalli, L. var, fruneotaceum, Hook, f*) の栽培が行われており、現在も一部の地区では穀実として利用しながら茎葉(ワラ)は家畜の粗飼料源として重要な役割を果たしている。これを青刈飼料として利用するため播種期と刈取期について検討したので、その概要を報告する。

1. 試験方法

- (1) 供試品種 スキ在来(須木村産)
- (2) 播種期 4月7日, 5月6日, 6月3日
- (3) 播種法 畦幅 40cm 条播 6㎡ 2反復
- (4) 施肥量(kg/a)
基肥 N 1.0 P₂O₅ 2.5 K₂O 1.0
追肥(刈取毎) N 1.0 K₂O 1.0kg/a
- (5) 刈取期 草高 50cm期 同 70cm期 出穂期

2. 試験の結果と考察

スキ在来の出穂期は4月播区が播種後142日目の8月27日, 5月播区が119日目の8月27日, 6月播区が111日目の9月22日で5月播区及び6月播区では出穂が著しく短縮した(図1)。

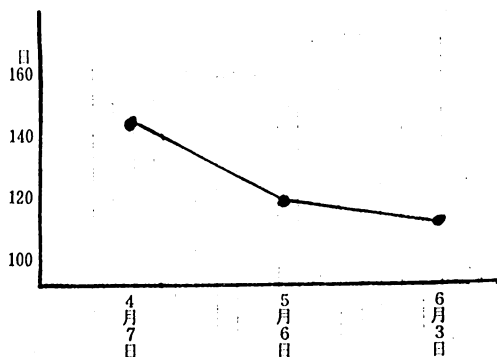


図1 播種期別出穂状況

草丈の播種期別合計伸長量は4月播区, 5月播区, 6月播区がそれぞれ913cm, 768cm, 539cmで早播ほど大きかった。また刈取期別合計伸長量は中刈区>早刈区>晩刈区の順であった。

刈取期別生草及び乾物収量(表1)は4月播の50cm期及び70cm期刈りが4回5月播では3回6月播は2回の刈取りであった。出穂期刈りでは、いづれの播種期も刈取後の再生は認められなかった。収量は各月とも70cm期刈りが多く、中でも5月6日播は3回刈りて1023kg/aの収量をあげ、次いで50cm期であった。出穂期刈りは1回刈りのため収量は劣った。月別では5月>4月>6月の順であった。

表1 生草・乾物収量

ハ 種	項目 ステージ	生草収量 (kg/a)					風乾物 収量 (kg)
		1	2	3	4	合計	
4 月 5 日	50	102	171	213	217	703	91.8
	70	220	317	260	153	950	158.5
	出	567				567	131.7
5 月 6 日	50	150	333	252		735	108.0
	70	265	304	454		1,023	195.9
	出	313				313	99.2
6 月 3 日	50	213	238			450	72.9
	70	238	233			471	81.2
	出	175				175	47.3

3. まとめ

以上のことから播種期は4月~5月上旬がよく刈取りは草高70cm期刈りが適期であると思われた。また青刈り利用の場合のヒエは初期生育がよく収量もかなりの量が見込まれ、暖地型飼料作物として有望であることが判明したが、今後は刈高及びハーベスターを含めた機械適応性、施肥量と利用面からの嗜好性や貯蔵技術を解明する。